

青年の家族アイデンティティと父親のワーク・ライフ・バランス —母親の就労形態を含めた検討—

尾形 和男

学校教育講座

Exploring Links Between Father's Work-Life Balance, Mother's Working Patterns and Family Identity in Adolescence.

Kazuo OGATA

Department of School Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

問題と目的

近年の動向として、仕事と家庭へのかかわりを自分に納得のいくバランスで行い、それにより個々の生活の質を上げようとする、ワーク・ライフ・バランス (Work-Life Balance: WLB) の考えが広がりつつある。

1980年前後から、これに関する考えとそれに伴う具体的な動きについては、乳幼児期の家庭を対象として調査研究が展開されていた。その多くが、子育てにあたる妻の精神的、肉体的負担を軽減するためには夫のコミュニケーションを中心とする家庭関与が重要であり、そのことが妻の精神的ストレスを軽減し、子育てのための環境が整い、子どもの発達・適応に良好な影響を及ぼすとする内容のものが多く (例えば、Clarke-Stewart, 1978; Crockenberg, 1981; Kerig, 1987; Whipple & Stratton, 1991; 牧野・中西, 1985; 諏訪・戸田・堀内・田丸・角本, 1997; 原・江崎・弦巻・石橋・田島, 1998; Belsky, Crnic, & Gable, 1995)。

しかし、これらの先行研究は、子育てにあたっている家庭を対象として、妻にかかる負担を現実的な問題として扱っており、ワーク・ライフ・バランスとしての考えを包含してはいるものの、必ずしもワーク・ライフ・バランスとしての明確な定義に基づき、父親の仕事と家庭関与のバランスに焦点を当てて検討されたものとは言い難い。

女性の社会進出の増加に伴い、母親も父親と同様に仕事と家庭を抱えることが多くなりつつある現在、仕事への関与と家庭への関与を両軸に置いた、ワーク・ライフ・バランスの視点に基づいた検討が不可欠である。

ワーク・ライフ・バランスに基本を置く考えの中で

も、乳幼児を中心とする子育ての時期から児童期、青年期、成人期への移行に伴い夫婦が関与する子育てと家族関係は子どもの年齢と共に変化して行くことになり、ライフ・ステージという視点からワーク・ライフ・バランスを捉えることも重要である。何故なら、子育てを通して生きている我々の生活は、子どもの発達段階に応じて、就学、進学、就職などの変化が生じるのであり、その度に家族の個々のメンバーに大きな変化が生じている側面があるからである。

このような考えに基づいて、尾形 (2010) は大学生の家庭を対象として父親のワーク・ライフ・バランスが家族成員に及ぼす影響について検討を加え、父親が仕事と家庭への関与を両立させている家庭では、夫婦関係満足度が高いことを示した。また、Darcy & McCarthy (2007) は、ライフ・サイクルという視点から、就学前、6歳から12歳、13歳以上の各発達段階に所属する子どもを育てている家庭の両親のワーク・ライフ・コンフリクトの調査を実施し、就学前の子どもの世帯では同僚からの養育に関するサポートがワーク・ライフ・コンフリクトの軽減に役立ち、他の年齢に属する子どものいる家庭では、仕事への関与がワーク・ライフ・コンフリクトを増加させていることを指摘し、ライフ・サイクルのそれぞれの段階に応じてワーク・ライフ・バランスを検討することの必要性を示唆している。これらの研究は、ライフ・ステージの視点に基づいた研究であり、徐々に取り組みが始まってきているものの全体として数はまだ少ないのが現状である。

夫婦関係のあり方により、家族成員である子どもの発達・適応が影響を受けることは従来の諸研究から明らかにされてきているが、家族のあり方と家族アイデ

ンティティについては比較的最近検討されるようになってきた。

家族アイデンティティとは「自分は家族の一員であるという感覚が、斉一生と連続性を持って自分自身の中に存在し、また、それが他の家族成員にも承認されているという認識」(林・岡本,2005)をさし、本来はErikson (1950) の提唱したアイデンティティ理論のうち、集団への連帯に焦点を当てた概念である。ワーク・ライフ・バランスが徐々に進行する現在、家庭生活の質を上げるために、家族成員の心理的な交流に基づく情緒的な絆が形成されることが重要なことと考えられるが、家族アイデンティティの形成もこれに関連する重要な問題と考えられる。

家族内の出来事と家族成員の発達・適応に関する先行研究についてみると、従来家族アイデンティティは自然に形成される側面が強いと考えられてきてため、取り上げられることは少なかったようである。しかし、少子化、女性の社会進出などの現象が進行する中で、家族内の交流も減少する傾向にあり、家族アイデンティティ形成にも問題が生じていると考えられる。これに関して、林・岡本 (2003) は過去の家族内の出来事が家族アイデンティティ形成に影響すること、家族アイデンティティは個としてのアイデンティティ形成と関係することも指摘している。つまり、最近変化しつつある社会状況の中で営まれる家庭生活では家族成員個々の自我同一性形成に好ましくない影響が生じかねないことになる。またこのことと関連して、林・岡本 (2005) は家族との共同行動の時間数・活動数の量などが、日常・非日常ともに家族アイデンティティの発達レベルと関連があることを指摘しており、家族内の交流の重要性を取り上げている。その一方で、父親のワーク・ライフ・バランスと家族成員の生活についての尾形 (2010) の報告にもあるように、父親が家庭関与を中心としながらも仕事にも関わっている家庭では、家族成員は家庭で過ごす時間、家族と一緒に会話をする時間をより長く感じているのである。つまり、ワーク・ライフ・バランスのあり方は家族成員の家族との一体感がより強力に形成されるための影響力を持つものと推測され、家族成員の家族アイデンティティ形成と同時に、家族成員の自我同一性形成にとっても重要な問題であることは十分に推測できる。

これらの先行研究から、家族の中に展開される種々の出来事は家族成員の家族アイデンティティ形成に深くかかわっていることが理解できる。

また、最近女性の社会進出に伴い、共働き家庭のみならず、パートタイマーとして働く女性も多く見られるようになってきた。このような状況の変化は必然的に家庭内の女性として、母親として、あるいは妻としての立場からワーク・ライフ・バランスのあり方にも影響をもたらしているものと考えられる。共働き家庭、

専業主婦家庭、パートタイムの家庭など、女性の生き方の多様化に基づいて家族のあり方も変化せざるを得ない状況にあるといえる。したがって、女性の生き方の現れである就業形態に基づく家族の状況を視点に入れていくことは重要な意味を持つものと考ええる。

本研究では上記の視点に基づいて、父親のワーク・ライフ・バランスのあり方が、家族成員の発達・適応に及ぼす影響について検討する。特に、自我同一性形成に影響をもたらすと考えられる家族アイデンティティとの関連性について検討することを目的とする。分析検討を進めるにあたり、家族内の状況について、共働き家庭、専業主婦家庭、パートタイム家庭（以後、パートタイムの仕事をしている家庭をパートタイム家庭と記載する）はそれぞれ夫婦の役割関係が異なっていると考えられるので、これらの家族状況の違いを視点におく。

方法

1. 調査対象者

愛知県と東京都の大学生・大学院生333名（学部4年生89名、3年生52名、2年生49名、1年生120、大学院修士課程1年生23名。男性133名、女性200名。平均年齢20.1歳。男性20.05歳、女性20.14歳）。学生の両親については共働き家庭120世帯、世帯専業主婦家庭68世帯、パートタイム家庭143世帯。

2. 調査用紙

調査用紙は、①調査対象学生の性別、年齢、父親・母親の職業を問うもの。②家庭での父親の関与状況について問う17項目（尾形,2005）。③夫婦関係満足度について問う6項目（諸井,1996）。④夫婦の家庭内での仕事分担を問う11項目（諸井,1996）。⑤夫婦の家庭内での仕事分担について学生の要望を問う11項目（諸井,1996を参考に作成）。⑥家族と平日・休日に一緒に過ごす時間を問う項目（林・岡本,2005）。⑦家族との過ごし方について問う項目（林・岡本,2005）。⑧家族との会話時間を問う項目（林・岡本,2005）。⑨家族との会話の内容を問う項目（林・岡本,2005）。⑩学生の家族に対する家族アイデンティティを問う37項目（林・岡本,2005）。⑪ワーク・ライフ・バランスの意味について問う項目（家族社会心理学研究所,2008）。⑫学生の将来のワーク・ライフ・バランス観を問う4項目（家族社会心理学研究所,2008）。上記②～⑤、⑩の質問紙は5段階評定、⑫の質問紙は4段階評定である。調査は、授業の中で説明し、協力してくれる学生に配布し記入後回収した。

本研究では、今回の目的から質問紙①②及び⑩の質問紙の分析を行った。

2. 調査時期

2009年7月～9月。

Table1 父親の家庭関与と仕事関与に関する因子分析結果

項目	因子	I	II	α
(第1因子：家族との交流)				
1. 父親は休暇の時、母親と一緒にいる時間を大事にしている		.849	.032	.831
6. 父親は家族で食事をするとき、仕事のことでなく いろいろな話をしてくれる		.780	.086	
7. 父親は休暇の時、みんなを誘って出かけることがある		.674	-.051	
2. 父親は休暇の時、母親と一緒にいる時間を大切にしている		.670	.059	
9. 父親は忙しくて、家族との会話が少ない		.603	-.274	
5. 父親はあなたの将来のことについてよく相談にのってくれる		.599	.181	
12. 父親は休暇の時家族と関わらず、一人でのんびりしている ことが多い		.565	-.143	
8. 父親は自分の生き方を話してきかせてくれる		.486	.353	
(第2因子：仕事への関与)				
16. 父親は家族と話をするとき、仕事のことが多い		-.178	.654	.719
14. 父親は仕事のことで悩んだり喜んだりしている		.079	.607	
11. 父親は休暇の時でも仕事のことが頭から離れないようである		.295	.549	
15. 父親は仕事が順調なとき、家族と良く話しをする		.117	.524	
13. 父親の様子から仕事がうまく行っているかどうかわかる		.026	.467	
4. 父親は仕事の話をするとき生き生きしている		.380	.428	
因子間相関				
	I		II	
	II	.095		

(項目番号のアンダーラインは逆転項目を示す)

結果

1. 父親の仕事と家庭へのかかわりを測定する質問紙の構造化

父親の仕事と家庭へのかかわりの状況を調べるための質問紙について、共働き家庭、専業主婦家庭、パートタイム家庭とを合わせた全家族を基にして因子分析(主因子法, Promax 回転)を実施し因子の抽出を行った。因子負荷量の絶対値 .40以上を基準に3因子15項目を採用した (Table1)。

第1因子は項目1「父親は休暇の時、母親と一緒にいる時間を大事にしている」、項目6「父親は家族で食事をするとき、仕事のことでなくいろいろな話をしてくれる」、項目7「父親は休暇の時、みんなを誘って出かけることがある」などの項目の負荷が高く、家族への積極的な関与度に関する内容を指しているので「家族との交流」と命名した。第2因子は項目16「父親は家族と話をするとき、仕事のことが多い」、項目14「父親は仕事のことで悩んだり喜んだりしている」、11「父親は休暇の時でも仕事のことが頭から離れないよう

ある」などの項目の負荷が高く、家族よりも仕事への強い関与度を示し、仕事に左右されている状況を示すので「仕事への関与」と命名した。2因子それぞれの信頼性を確認するために Cronbach の信頼性係数を算出したところ、それぞれ $\alpha = .831, .719$ であり十分な信頼性を有していることが確認された。

2. 家族アイデンティティを測定する質問紙の構造化

家族成員の家族アイデンティティの状況を調べるための質問紙について、共働き家庭、専業主婦家庭、パートタイム家庭を合わせた全家族を基にして因子分析(主因子法, Promax 回転)を実施し因子の抽出を行った。因子負荷量の絶対値 .40以上を基準に5因子15項目を採用した (Table2)。第1因子は項目19「私は、家族メンバーの一人であることに、喜びや幸福感を感じる」、項目18「私にとって家族の一員であることは、心の支えである」、項目20「私は、家族メンバーの一人であることから、安心感を得ている」などの項目の負荷が高く、自分と家族との関係の中で家族の存在を感じている内容を示すので「家族の存在感」と命名した。第2因子は項目3「私は、家族の決まりや考え方などに、

Table2 家族成員の家族アイデンティティについての因子分析結果

項目	因子	I	II	III	IV	V	α
(因子1：家族の存在感)							
19.私は、家族メンバーの一人であることに、喜びや幸福を感じる		.947	.001	.008	-.002	-.081	.931
18.私にとって家族の一員であることは、心の支えである		.929	-.003	-.029	.047	-.094	
20.私は、家族メンバーの一人であることから、安心感を得ている		.897	.048	.034	.001	-.132	
17.私は、家族メンバーの一人であるといわれると、よい気持ちをする		.786	.047	-.023	.034	-.009	
24.私は、家族のことをほめられると嬉しくなる		.720	-.106	-.008	-.017	.194	
29.私にとって、家族の一員であることは重要なことである		.717	.038	.011	.007	.067	
27.私は、家族の悪口を言われたら、自分の悪口を言われたような気になる		.618	-.118	-.062	.040	.067	
25.私にとって、家族は唯一無二の存在である		.594	.037	.101	-.030	.129	
26.家族にとって重要なことは、私にとっても重要である		.556	-.053	.066	.045	.183	
(因子2：家族価値との適合性)							
3.私は、家族の決まりや考え方などに、納得できないものが多い		-.195	.843	.064	-.044	.052	.892
4.家族のものの考え方や行動パターンは私にとって受け入れやすいものである		.135	.835	-.118	-.047	-.038	
2.私は、家族の目標や規範は抵抗なく受け入れられる		.085	.729	.014	-.049	.030	
1.家風や家族風土は、自分の価値観にあっている		.143	.688	.095	-.025	-.126	
5.家族の考え方は、私の考え方から離れているような気がする		-.222	.677	.087	.162	.094	
7.私は、家族の決まりを守ることに負担を感じない		-.067	.671	-.099	.061	.023	
6.私の意見は、家族と大体同じである		.131	.565	-.130	.161	.119	
(第3因子：家族との関係)							
13.今のままでは、次第に家族が失われていってしまうような気がする		-.023	-.009	.918	-.074	-.118	.900
10.家族といっても、「家族でない」と感じることもある		.053	-.080	.776	.055	.037	
11.私は、家族との関係がぎくしゃくしていると感じる		-.076	-.013	.754	.105	.135	
16.私は、家族と疎遠な関係にある		-.003	-.107	.712	.136	.083	
12.私は、現在の家族から逃げ出したい		.103	.147	.633	.034	-.044	
14.私の家族は、総合してみるとよい家族である		.298	.224	.450	-.162	-.021	
(第4因子：対家族的自己)							
31.家族に見られている自分と本当の自分は一致していないように感じる		-.016	-.033	-.023	.945	-.046	.861
30.家族の前での自分は、本当の自分でないような気がする		.043	.052	.072	.795	-.077	
32.家族といっても、私はありのままの自分でいられる		.228	-.052	-.111	.709	.094	
33.家族は本当の自分をわかっていないと思う		-.034	.117	.078	.557	-.022	
35.家族といる時、私はとても気をつかっている		-.042	.067	.234	.438	-.071	
(第5因子：自己に対する家族の評価)							
37.私の家族は私のことを誇りに思っている		.099	.053	.004	-.044	.800	.866
36.私の家族は、私を家族の一人として高く評価している		.218	.048	.008	-.062	.680	
因子間相関							
I							
II		.616					
III		.633	.648				
IV		.555	.547	.613			
V		.562	.414	.468	.347		

(項目番号のアンダーラインは逆転項目を示す)

納得できないものが多い」(負の負荷)、項目4「家族のものの考え方や行動パターンは私にとって受け入れやすいものである」、項目2「私は、家族の目標や規範は抵抗なく受け入れられる」などの項目の負荷が高く、家族成員の家族価値との一致度を示す内容であるので、「家族価値との適合性」と命名した。第3因子は項目13「今のままでは、次第に家族が失われていってしまうような気がする」(負の負荷)、項目10「家族といえども、「家族でない」と感じることもある」(負の負荷)、項目11「私は、家族との関係がぎくしゃくしていると感じている」(負の負荷)などの項目の負荷が高く、家族との関係をとらえる内容を指しているので「家族との関係」と命名した。第4因子については項目31「家族に見られている自分と本当の自分は一致していない

ように感じる」(負の負荷)、項目30「家族の前での自分は、本当の自分でないような気がする」(負の負荷)、項目32「家族といえども、私はありのままの自分でいられる」などの項目の負荷が高く、家族成員が家族を通して自分らしさを確認する内容であるので「対家族的自己」と命名した。さらに第5因子については項目37「私の家族は私のことを誇りに思っている」、項目36「私の家族は、私を家族の一人として高く評価している」の各項目の負荷が高く、家族成員に対する家族の評価を示す内容を示すので「自己に対する家族の評価」と命名した(第1因子から第5因子名は、林・岡本(2005)を参考に命名した)。また、5因子それぞれの信頼性を確認するために Cronbach の信頼性係数を算出したが、第1～第5因子の α 係数は順に、 α

Table3 家族アイデンティティの分散分析結果

(家族アイデンティティ)		家族の存在感 n		家族価値との n		家族との関係 n		対家族的自己 n		自己に対する n	
性別	家族形態			適合性						家族の評価	
男	共働き	2.76(.66)	52	2.53(.67)	52	2.43(.39)	51	2.85(.66)	52	2.73(.61)	52
	専業主婦	2.88(.74)	17	2.52(.67)	17	2.47(.36)	16	3.02(.56)	17	2.56(.71)	17
	パートタイム	2.86(.61)	54	2.68(.58)	54	2.36(.33)	54	2.97(.66)	54	2.60(.78)	55
女	共働き	3.25(.68)	67	2.77(.65)	64	2.36(.35)	67	3.17(.74)	68	3.07(.74)	67
	専業主婦	3.05(.46)	38	2.56(.56)	38	2.37(.39)	39	3.05(.54)	38	2.53(.55)	38
	パートタイム	3.22(.60)	88	2.67(.71)	84	2.33(.38)	84	3.22(.70)	88	2.87(.67)	88
性別		17.99***		1.16(<i>n. s.</i>)		2.13(<i>n. s.</i>)		5.25*		4.82*	
家族形態		.31(<i>n. s.</i>)		.75(<i>n. s.</i>)		.82(<i>n. s.</i>)		.52(<i>n. s.</i>)		4.78**	
性別×家族形態		1.10(<i>n. s.</i>)		1.16(<i>n. s.</i>)		.19(<i>n. s.</i>)		.76(<i>n. s.</i>)		1.20(<i>n. s.</i>)	

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .05$

(上段の数字は平均値、括弧内はSD、下段はF値(有意確率)、nは人数)

=.931,.892,900,861,866であり十分な信頼性を有していることが示された(Table2)。

3. 家族形態、家族成員の性別に基づく家族アイデンティティとの関係

調査対象となっている各家庭の家族形態、家族成員の性別によって、家族アイデンティティ形成に影響があるとも考えられる。

ここでは、家族アイデンティティ(「家族の存在感」「家族価値との適合性」「家族との関係」「対家族的自己」「自己に対する家族の評価」)を従属変数として、性別(男・女)×家族形態(共働き家庭・専業主婦家庭・パートタイム家庭)の2要因の分散分析を行った(Table3)。

その結果、「家族の存在感」「対家族的自己」「自己に対する家族の評価」それぞれにおいて性の要因の主効果が示され、いずれも女子において高かった($F(1,311)=17.99, p < .001; F(1,311)=5.25, p < .05; F(1,311)=4.82, p < .001$)。また、「自己に対する家族の評価」においても家族形態の要因の主効果が確認され($F(2,311)=4.78, p < .01$)、共働き家庭が専業主婦家庭よりも高いことが示された。しかし、家族要因の主効果及び交互作用については有意な結果は得られなかった。

4. 父親のワーク・ライフ・バランスと家族成員の家族アイデンティティ形成との関係

父親のワーク・ライフ・バランスが家族成員の家族

Table4 父親の「家族との交流」と「仕事関与」に基づく家族成員のアイデンティティ

家族形態 家族アイ デンティティ	共働き家庭						専業主婦家庭						パートタイム家庭					
	F 値	家族との交流×仕事関与				多重比較	F 値	家族との交流×仕事関与				多重比較	F 値	家族との交流×仕事関与				多重比較
		①高×高	②高×低	③低×高	④低×低			①高×高	②高×低	③低×高	④低×低			①高×高	②高×低	③低×高	④低×低	
家族の存在感	10.78*** (4.60) 38	30.74 (6.91) 23	27.78 (4.83) 21	27.38 (6.48) 35	23.11 (4.50) 35	①②③>④	3.55* (4.75) 20	28.40 (3.68) 14	28.96 (5.80) 12	26.00 (4.46) 15	24.07 (4.46) 15	①②>④	4.44** (4.67) 37	29.30 (5.52) 38	28.68 (6.16) 22	24.23 (5.60) 37	27.38 (5.60) 37	①②>③
家族価値との 適合性	8.30*** (4.09) 37	21.49 (4.51) 24	20.92 (3.97) 21	18.57 (4.50) 21	16.86 (4.50) 35	①②>④	2.57 (3.30) 20	19.45 (3.43) 14	20.07 (4.33) 13	16.62 (2.96) 15	18.80 (2.96) 15		.740 (4.50) 37	19.30 (3.80) 38	20.26 (4.42) 23	18.70 (4.41) 37	19.81 (4.41) 37	
家族との関係	10.76*** (2.82) 38	21.82 (4.02) 24	20.80 (3.41) 21	19.52 (4.93) 21	16.83 (4.93) 35	①②>④	1.35 (3.44) 20	19.70 (3.07) 14	20.21 (4.71) 12	17.75 (3.72) 15	18.33 (3.72) 15		4.75** (3.25) 37	21.62 (2.80) 38	21.29 (3.99) 23	18.78 (3.94) 37	19.08 (3.94) 37	②>③④
対家族的自己	4.19** (3.19) 38	16.42 (3.80) 24	15.88 (3.37) 21	14.10 (3.73) 21	13.85 (3.73) 35	①>④	.43 (2.68) 20	14.85 (3.05) 14	14.71 (3.80) 12	14.58 (1.76) 15	15.67 (1.76) 15		.76 (3.56) 37	15.92 (3.29) 37	15.89 (3.64) 23	14.65 (3.44) 37	15.68 (3.44) 37	
自己に対する 家族の評価	11.48*** (1.21) 37	6.59 (1.33) 24	6.04 (1.09) 21	5.90 (1.32) 21	4.89 (1.32) 35	①②>④	1.52 (1.10) 20	5.50 (.92) 14	5.11 (1.23) 12	4.67 (1.41) 15	4.87 (1.41) 15		.70 (1.41) 37	5.30 (1.45) 38	5.68 (1.56) 23	5.43 (1.41) 37	5.30 (1.41) 37	

*** $p<.001$ ** $p<.01$ (表中上段の数字は平均値、括弧内はSD、下段は人数 多重比較は全て $p<.05$)

アイデンティ形成にどのような影響力を持つのであろうか。このことについて検討を加えるために、父親の家庭関与と仕事関与のバランスの状況をワーク・ライフ・バランスの基本として捉えることとする。その際、父親が家族との交流を進行させる一方で、仕事へのかかわりを視点に入れて検討した。

このような視点から、本研究では父親の家庭関与の「家族との交流」の程度と「仕事への関与」の程度による群を形成し、それに基づいて家族成員の家族アイデンティティの形成の程度の相違を検討する。具体的には「家族との交流」と「仕事への関与」の下位項目の平均得点を基にして、「家族との交流高」×「仕事への関与高」、「家族との交流高」×「仕事への関与低」、「家族との交流低」×「仕事への関与高」、「家族との交流低」×「仕事への関与低」の4群を形成して、それぞれの群に属する家族成員の家族アイデンティティの差について家族形態別に一元配置分散分析により検討を加えた (Table 4)。

(1) 共働き家庭について

Table5に示すように、共働き家庭では全ての家族アイデンティティにおいて有意な効果がみられた。有意な効果がみられた場合には、*Tukey* 法による多重比較により群間の差異を検討した。

まず、「家族の存在感」については「家族との交流高」×「仕事への関与高」、「家族との交流高」×「仕事への関与低」、「家族との交流低」×「仕事への関与高」の各群は「家族との交流低×仕事への関与低」群よりも有意に高かった。「家族価値との適合性」については「家族との交流高」×「仕事への関与高」、「家族との交流高」×「仕事への関与低」両群は「家族との交流低」×「仕事への関与低」両群よりも有意に

高い値を示した。また「家族との関係」において、「家族との交流高」×「仕事への関与高」、「家族との交流高」×「仕事への関与低」両群は「家族との交流低」×「仕事への関与低」群よりも有意に高かった。また、「対家族的自己」については「家族との交流高」×「仕事への関与高」群は「家族との交流低」×「仕事への関与低」群よりも有意に高かった。さらに、「自己に対する家族の評価」については「家族との交流高」×「仕事への関与高」、「家族との交流高」×「仕事への関与低」両群は「家族との交流低」×「仕事への関与低」群よりも有意に高い値を示した。以上の結果をまとめると、仕事への関与の高低に関わらず家族との交流を高く取る父親の家庭の場合に、家族成員である学生の家族アイデンティティ形成がプラスの方向で強く影響を受けるとことが指摘できる。同時に、仕事への関与を高く取る家庭ではその傾向が低くなることが指摘できる。

(2) 専業主婦家庭について

専業主婦家庭について、共働き家庭のように明確な関係が確認されなかったが「家族の存在感」にのみ有意な効果が確認された。

「家族との交流高」×「仕事への関与高」と「家族との交流高」×「仕事への関与低」群が「家族との交流低」×「仕事への関与低」群よりも有意に高い値を示した。つまり、父親が家族との交流と仕事へのかかわりが高い場合において、家族との交流が低く仕事への関与が低い家庭よりも青年の「家族の存在感」が高くなることが示された。

(3) パートタイム家庭について

パートタイム家庭についても、共働き家庭のような関係はみられなかった。「家族の存在感」と「家族と

の肯定的関係」においてのみ有意な効果が確認された。

「家族の存在感」では「家族との交流高」×「仕事への関わり高」と「家族との交流高」×「仕事への関わり低」群が「家族との交流低」×「仕事への関与高」群よりも有意に高い値を示した。また、「家族との関係」においては「家族との交流高」×「仕事への関与低」群が「家族との交流低」×「仕事への関与高」、「家族との交流低×仕事への関与低」両群よりも有意に高かった。つまり、家族との交流が低い家庭は家族との交流が高い家庭よりも「家族の存在感」と「家族との関係」が低いことが示された。

以上の結果から、共働き家庭、専業主婦家庭、パートタイム家庭それぞれに共通することとして、父親の家族と交流が高く仕事への関わりが低い場合と、仕事への関与の高低にかかわらず家族との交流が高い場合において家族アイデンティティ形成に積極的な影響力が存在することが指摘できる。

考察

女性の生き方の多様化、また社会進出に伴って家族形態も徐々に変化しているが、本研究ではこのような視点から共働き家庭、専業主婦家庭、パートタイム家庭それぞれ家族形態別に、父親のワーク・ライフ・バランスが家族成員の家族アイデンティティ形成に及ぼす影響について検討を加えた。そのために、まず、母親の就業形態に基づく家族形態を基本にして、また家族成員の性別も含めて検討を加えた。

まず、家族アイデンティティ形成について、家族形態別（共働き家庭・専業主婦家庭・パートタイム家庭）×性別、を加えて2要因分散分析を行ったが、「家族の存在感」、「対家族的自己」、「自己に対する家族の評価」において性の要因の主効果が確認され、女子が男子よりも有意に高いことが示された。この結果については、林・岡本（2005）の指摘にあるように、男子よりも女子学生の方が家族アイデンティティ得点が高いとする報告と一致する。この男女差は、宮下・大野（1997）の指摘にもあるように、男子は「分離」や「個体化」のような個としての自立が要請されるが、女子は「世話」、「他者との関係」に表現されるように人との繋がりが基本的に要求されるために、男子以上に家族とのかかわりが人とのかかわりとしての意味を持つからではないかと考えられる。また、家族アイデンティティの中でも、「自己に対する家族の評価」において、共働き家庭が専業主婦家庭よりも高いことが示された。この結果は共働き家庭と専業主婦家庭の家族間のかかわりの違いに基づくものと考えられる。共働き家庭では夫婦共に仕事と家庭、子育てにかかわることが多く、夫婦の相互の協力など個々に取り組むべきことが多く存在する。多重役割に向き合った生活を余儀なくされる中では家族成員である子どもに対して子どもに

対する自立を促し、そのために一人の人間として対応する機会が多くなり上記の結果が生じているとも考えられるのであるが、このことについては、さらなる検討を要すると考える。

さらに、父親のワーク・ライフ・バランスが家族成員の家族アイデンティティ形成にどのような影響をもたらすのかについて家族形態別に検討を加えた。結果として、共働き家庭において「家族との交流」、「仕事への関わり」共に高い群と「家族との交流」が高く「仕事への関わり」が低い群が家族アイデンティティ形成に積極的な影響力を持つことが確認された。つまり、仕事への関わり的高低に関わりなく家族との交流を中心とした夫のかかわりが重要であることが示されていると考えられる。専業主婦家庭、パートタイム家庭でも同様の結果が得られたのであるが、これら2家族形態は共働き家庭よりも影響が弱いことも示されている。この結果は、共働き家庭では夫婦ともに仕事をしているために、家庭において家事などの仕事へのかかわりに対する夫の協力、妻の気遣いなど相互の協力的のかかわりが必然的に不可欠であり、自然と夫婦の相互のやりとりが展開されることが多くなる状況の下、家族成員への影響力も生じているとも考えられる。さらには、相互の協力的のかかわりは、夫と妻が共働きを始めたとき時点から継続されている可能性があり、今現在に至っているとも考えられ、比較的自然な形で夫の家族との交流は行われて来ている中で影響力が蓄積されて来ているとも考えられる。

また、父親が家族との交流を多く取っている場合に家族アイデンティティ形成に正の影響をもたらすという結果に関連して尾形（2010）は、家族成員の家族と一緒に過ごす時間の長さ、家族と一緒に交わす会話時間の長さについて、父親の家族との交流が少なく、仕事関与が多い場合には家族成員は長い時間家族と一緒に過ごしていると認識しておらず、逆に父親の家族交流も仕事関与も多い場合には会話時間が長いと認識しているとしている。したがって、父親が家族との交流において高いかかわりのある家庭では、家族成員が共に過ごすことのできる環境にあり、子どもが父親・母親から多くの影響を受けると同時に、家族成員相互のかかわりから家族アイデンティティ形成に積極的な影響をもたらす得る環境状況にあると推測される。したがって、家族アイデンティティは家族とのかかわりの中で大きな影響を受けることが改めて確認されたといえる。

しかし、父親のワーク・ライフ・バランスを介した影響力については、父親・母親のどのような要因が家族成員に影響をもたらしているのか、夫婦で形成する家族のあり方のどのような要因が影響をもたらしているのかなどさらに検討しなければならない。

また、本研究では父親の影響力を中心として分析検

討を行った。本来家族は夫婦の関係が大きく影響するものであり、家族成員もその関係の中で影響を受けることになる。したがって、家族の在り方については基本的に夫婦を軸にした視点が重要である。このことは夫婦のワーク・ライフ・バランスについても同様の視点が求められることを意味するものであろう。つまり、母親（妻）のワーク・ライフ・バランスは母親（妻）のライフ・ステージの一つの生き方を現したものであり、父親（夫）についても同様にライフ・ステージの一つの生き方を示したものであり、このような背景を持つ夫婦の生活は夫婦それぞれのワーク・ライフ・バランスの接点での営みである。したがって家族成員の生活に関しては夫婦相互のワーク・ライフ・バランスの関係を含めたより具体的、現実的視点から検討する必要があると考える。そのためには、家族形態別に父親・母親のワーク・ライフ・バランスをそれぞれ測定し、その相違に基づいた分析がさらに必要と考える。

引用文献

- Belsky,J., Crnic, K., & Gable,S. 1995 The determinants of coparenting in families with toddler boys: Spousal difference and daily hassles. *Child Development*,66,629-642.
- Clarke-Stewart,K.A. 1978 And daddy makes three: The father's impact on mother and young child. *Child Development*,49,466-478.
- Crokenberg,S.B. 1981 Infant irritability, mother responsiveness, and social support influences on the security of infant-mother attachment. *Child Development*,52,857-865.
- Darcy,C., & McCarthy,A. 2007 Work-family conflict: An exploration of the differential effects of a dependent child's age on working parents. *Journal of European Industrial Training*,31,530-549.
- Erikson,E.H. 著（仁科弥生訳）1977 幼児期と社会 1・2 みすず書房
- 林奈那・岡本祐子 2003 青年の家族行事が体験が家族アイデンティティ形成に及ぼす影響 青年心理学研究,15,17-31.
- 林奈那・岡本祐子 2005 青年の家族に対する関与と家族アイデンティティ発達の関連 家族心理学研究,19,13-29.
- 原 高成・江崎明子・弦巻千文・石崎英子・田島朋子 1998 父親の育児意識が母親の満足度に及ぼす影響 日本発達心理学会第9回大会発表論文集,348.
- 家族社会心理学研究所 2008 青少年のワーク・ライフ・バランスに関する調査研究 四日市市男女共同参画課 調査・研究事業報告書,1-32.
- Kerig,P.K. 1987 The family context:couple satisfaction,parenting style,and speech to young children. Poster presented at the Biennial Meetings of the Society for Research in Child Development,Baltimore,MD.
- 牧野カツコ・中西雪夫 1985 乳幼児を持つ母親の育児不安：父親の生活および意識との関係 家政教育研究所紀要,6,11-24.
- 宮下 一博・大野朝子 1997 青年の集団活動への参加とアイデンティティ 千葉大学教育学部研究紀要Ⅰ 教育科学編,45,7-14.
- 諸井 克美 1996 家庭内労働の分担における公平性の知覚 家

族心理学研究,10(1),15-30.

- 尾形 和男 2005 子どもの視点からみた次世代に求められる父親像—父親の仕事と家族への関わり、子どもの父親に対する親和性に基づく分析的研究— 学校法人昌賢学園論集,4,107-128.
- 尾形 和男 2010 父親のワーク・ライフ・バランスに関する一考察—夫婦関係、家族メンバーの生活、子どものワーク・ライフ・バランス観との関係— 愛知教育大学研究報告,59（教育科学編）,1-8.
- 諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる・田丸尚美・角本典子 1997 埼玉県における子育ての実態と母親の育児ストレス—1歳児を保育園に預けて働く母親の場合— 鳥取大学教育学部研究紀要報告,39,83-129.
- Whipple,E.E., & Stratton,C.W. 1991 The role of parental stress in physically abusive families. *Child Abuse & Neglect*,15,279-291.

（2010年9月14日受理）